

## 最近の出生前診断・胎児診断



産婦人科医長：川上 剛史

当科は地域の産婦人科の拠点病院であり地域周産期センターとして活動しています。

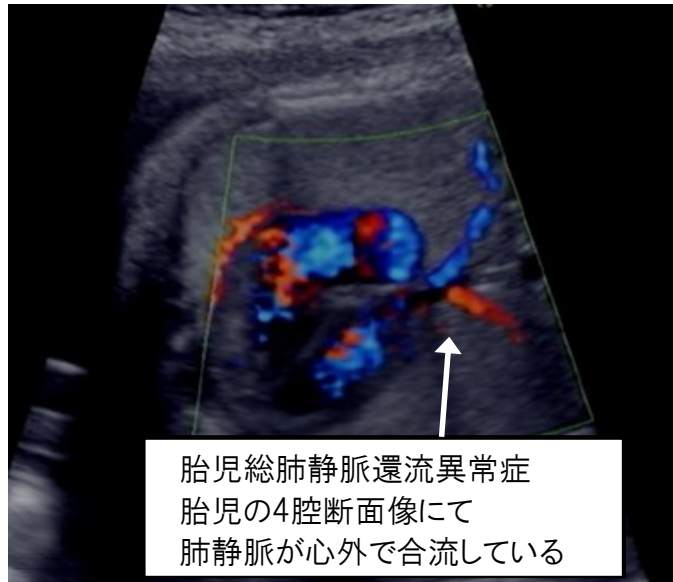
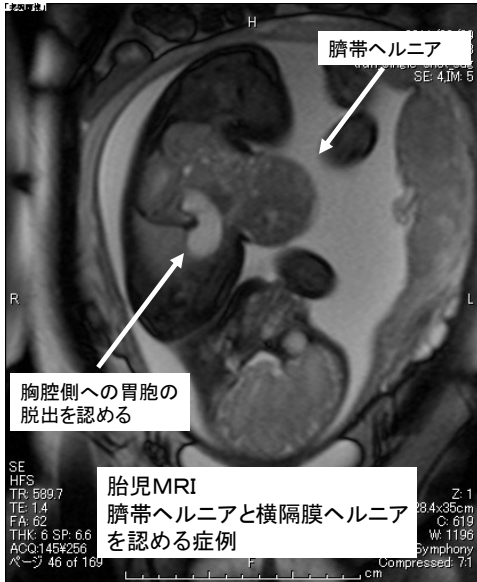
近年、周産期の分野においては画像診断技術の向上のため様々な出生前診断が可能となってきました。先天性疾患は多岐にわたりますが、その頻度は100人の出生において3~5人であり決して珍しいものではありません。中には出生直後より慎重な管理、集中的な治療、緊急手術が必要となる疾患も多数あります。特に先天性心疾患は100人中1人と先天性疾患において最も頻度が多く、出生前診断の重要性が最も叫ばれている分野で2010年4月には胎児心エコー検査が正式な専門医療行為として厚生労働省に認定され保険償還されました。



具体的にはblack boxとも言える子宮内の胎児を超音波検査・MRIなどで形態的・機能的な評価をおこない、予想される疾患を治療担当科（新生児科・小児循環器科・小児外科・心臓外科・脳外科・麻酔科）と合同で検討し治療計画・分娩計画を立案していきます。

もともと胎児異常が疑われた場合にご紹介頂くことが多い病院ではありましたが、近年は明らかに増加傾向を示しています。

特に最近では出生前診断が難しく出生後の緊急治療を要するTGA(大血管転位症)、TAPVC(総肺静脈還流異常)、CoA(大動脈縮窄症)などの診断例も散見され始めています。いずれも以前は児が出生後にshock vitalとなってから小児科に救急搬送されていた疾患です。出生前診断することで分娩時から小児科医に立会いを依頼し循環動態が悪化する前に治療を開始することで予後の向上が期待されています。今後も精度の高い診断が得られるように精進していく所存です。



また小児科診療の向上により、以前は性成熟期に到達しなかった先天性心疾患患者さんの分娩例も増加しつつあります。妊娠による先天性心疾患への影響は様々な議論がなされています。問題ないケースも多数ありますが、圧倒的に経験例が乏しく、症例毎に関係する科と連携をとり手探りで対応しなければならないケースも存在します。

今後は産科で出生前診断され小児科で治療をうけて、大きくなり、その後結婚し、またこの病院で出産する・・と言う様なことが日常적으로おこるのかもしれない。そう思うと不思議な縁を感じる

**出生前診断例数の年度別の推移**

	H18年度	H19年度	H20年度	H21年度	H22年度	H23年度 (4月～12月)
出生前診断例	26	29	37	26	44	40

今日このごろですが、一人でも多くのお子さんをご家族が幸せになるように努力していきたいと思っております。

産婦人科医長：川上 剛史



かわかみ たけし  
川上 剛史（産婦人科医長）  
1999年 福岡大学医学部卒

《専門分野》  
・ 周産期医療、超音波診断



《資格》  
・ 日本産科婦人科学会専門医  
・ 周産期新生児学会母体・胎児専門医